

自分にはいつも夢を追い求めてるところがあまりまして。

村田互が、それまで大活躍した東芝府中を退社してプロ宣言、フランスの2部リーグ、アピロン・バイヨンヌ（AB）のラグビーークラブに飛び込んだのは2シーズン前のことである。

言葉の壁、コミュニケーションの成否、などなどよくよく考えれば不安もなくはなかったが、それよりも海外でプレーしてみたいという夢のほうが勝っていた。

ひたすらその夢を追い求めた結果がフランス行きとなったのだった。

「フランスへ行きたくしと思へど／ふらんすはあまりに遠し」

は萩原朔太郎の時代である。

AB以外にもイタリアのクラブチームから同時にオファーがあつたけれど、北半球でつねに1位2位を争うのがフランスのナショナルチームであるとなれば、どう転んでも選択は決まってしまうのだ。そしてさらに夢を追いつけるわけである。チームが2部リーグから1部リーグへと昇格し、やがてはフランス代表のスクラムハーフ（SH）として5か国対抗戦やワールドカップに出てみようか。

背番号9番のSHとはフォワードがキープしたボールをバックスへ橋渡しする要である。日本では次の隣のポジションのスタンドオフが司令塔といわれるけれど、フランスではSHが司令塔でありゲームを組み立てる張本人なのだ。ABに初登場するやいなやわずかに1分で村田の本領が発揮されることになったのは何だったのか。奇跡か。バック스에配球されるかに

2年前、プロ選手としてフランスへ乗り込んだ。

●むらた・わたる 33歳。小学校1年から福岡でラグビーを始め、東福岡高、専修大、東芝府中とプレーを続け、99年渡仏。来シーズンはヤマハ発動機でのプレーとなる。オフィシャルホームページは、<http://www.wata888.net>。

Ω
OMEGA



文/寺崎 央 撮影/長岡洋幸

見えたボールを村田は胸に抱えスクラムサイドを電光石火すり抜けると、自らトライを決めたのだ。東芝時代によく見せたプレーだが、地元のサポーターはその判断と動きの素早さに驚き、またその後のバックスへ送るパスの速さにも感嘆の声をあげたのだった。

「ワター」と呼ばないときはパスの真似（例の速いやつの意）をしてABの町全部が村田を迎えた。なにせ町には彼の一家しか東洋人は住んでいないから目立った。